

パ ラ レ ル ワ ー ル ド

第 1 回

お父さんとお母さんとヒロ君

「ヒロ君、お父さんはまだお部屋でお仕事をしているのかな？」お母さんは台所で洗い物をしながら、ヒロ君に言いました。「ちよつと見てきてくれな
いかしら？」

ヒロ君は返事をしませんでした。なぜって、今テレビでとても面白い人形劇をしていたからです。「ねえ。ヒロ君、お母さんの言うことがきけないのかな？」

ヒロ君はぷつと膨れて、お母さんから顔を背けました。

「どうして、言うことをきいてくれないの？」

「だって……」ヒロ君はぼつりと言いました。

「いつも、僕ばかり言いつけられているんだもの。お父さんもお母さんも勝手だよ」

「そんなことを言わないで、ヒロ君」お母さんの悲しそうな声が聞こえます。

ヒロ君はちらりとお母さんの顔を見ました。

お母さんの目にはいっぱい涙が溜またっていました。

そんなお母さんの顔を見ていると、ヒロ君も悲しくなってきました。

そして、とても悪いことをしてしまったような気がしました。

「ちょっと待ってて」ヒロ君はテレビを見るのを止めて、お父さんの部屋に向かいました。

お父さんの部屋のドアを開けると、お父さんはパソコンの前に座っていました。

「お父さん」

「ああ。ヒロ君、ちょっと待っててよ。もうすぐお父さんのお仕事が終わるから」

「あのね。お母さんが……」

お父さんのパソコンを打つ手が止まりました。

「お母さんが何だったって？」

「お父さんを見てきてって。まだお仕事をしているのかなって？」

お父さんは少し悲しいような笑顔を見せました。

「ありがとう、ヒロ君。戻って、お母さんに言っておいで。お父さんは元氣にお仕事をしてるって」

「うん。わかった」

「それから、お母さんに今日のご飯は何を食べるのか聞いてきてくれるかな？」

「ええ？ また？ 僕、ずっと行ったり来たりなんだ。もう疲れちゃったよ」

「そんなこと言わないで、ヒロ君。お父さんもお母さんもヒロ君だけが頼りなんだよ」

「じゃあ、行ってくるよ」ヒロ君は台所に向かって走りました。

「お父さんはどうだった、ヒロ君？」お母さんは熱心に聞いてきます。

「お父さんは元氣にお仕事していたよ」

「ああ。よかった」お母さんはほっとしたようです。「それで、お父さんは何か言ってた？」

「今日は何のご飯を食べるのか、聞いてって」

「今日はカレーライスよ。ヒロ君の好きなカレーライス」

「わあい！ わあい！」

「じゃあ、ヒロ君、お父さんにお返事してきて」

「ええっ?! カレーライスを食べてからじゃ駄目?」

お母さんは少しだけ残念そうな顔をしましたが、すぐに笑顔に戻ります。「いいわよ。でも、カレーライスを食べてから必ずお返事してきてね」

「うん」

「おーい!! ヒロ君!」お父さんの声が聞こえます。

「何、お父さん?」

「お母さんはお返事してくれたのかい?」

「うん。でも、僕、カレーライスを食べなくっちゃいけないんだ」

「お父さんが話しているの?」お母さんが言いましました。

「うん」ヒロ君はちょっとだけ面倒になってきました。

「ここに? あの人は……お父さんはここにいるの?」

「ここにはいないよ。自分のお部屋にいるよ」

「そうなの。お父さんは自分のお部屋にいるのね」お母さんは立ち上がると、テーブルの上のお父さんの写真を手に取りました。「お母さんもヒロ君みたいにお父さんと会ってみたい」そして、しくしくと泣き始めました。「どうして、わたしはあなたに会えないのかしら？」

「おかあさん泣かないで」

お父さんがダイニングにやってきました。「お母さんが泣いているのかい？」

「うん」ヒロ君はお父さんに答えました。

「ヒロ君、お母さんに言っておくれ。泣かなくていいんだよ。お父さんはずっとここににいるから」とお父さんはテーブルの上のお母さんの写真に優しく手を掛けました。

「お母さんは泣き虫なんだ」ヒロ君はお父さんに言いました。

「それは仕方がないことなんだ。だって、ヒロ君と違って、お母さんはお父さんに会えないんだから」

「どうして？」

「わからない。どうしてこんなことになってしまったのか。彼女を失って悲しい日々を過ごしていたとき、気付いたんだ。ヒロ君だけはお母さんを失っていなかったのだと」

「お母さん、お父さんはここにいるよ。ずっとここにいて。だから泣かないで」ヒロ君は一生懸命に言いました。

「ありがとう、ヒロ君。あの人はここにいるのね。それを信じていれば、生きる力が湧いてくるわ」
「じゃあ、僕は仕事に出掛けるよ」お父さんは言いました。

「お父さん、お仕事だよ」

「じゃあ、わたしもそこまで一緒に行くわ。今日は服を買いにいくのよ」

「お母さん、服を買いにいくって。そこまで一緒だって」

「そうかい。じゃあ、今日はお母さんとデートなんだねって言ってよ」

「お母さん、お父さんがデートだねって」

「そうね。デートね」お母さんは涙を指で拭ぬぐいました。

ヒロ君はお父さんとお母さんの手を両手で握つて、そして二人の顔を見上げました。

いつものように世界が二重写しになっています。

「すし凄^い雨だな」さかさざきりようへい坂崎良平は会社の窓から真つ黒な空を見上げてつぶや呟いた。

こんな雨がもう三日も続いている。大雨警報・洪水警報も出っぱなしだが、当然ながら誰だれも気にしていない。

見下ろすと、近くを流れる川が見えた。普段から水量の多く流れの速い川だったが、結構立派な堤防の上端すれすれまで、ごうごうと波打つこげ茶色の濁流が迫っている。

「大丈夫かな？」良平はさらに呟いた。

「おいおい。ちゃんと仕事しろよ、坂崎」課長のおおむら大村が言った。「窓の外に何かいいものが見えるのか？」

「いや。水の量、結構多いな、と思って。大丈夫ですかね？」

「ああ？」大村は窓辺に近付いた。

「こんなことはよくあるよ」

「よくあるんですか？」

「五、六年に一度ぐらいかな？」

「結構珍しいじゃないですか」

「おまえここに来て何年だった？」

「二年ちよつとです」

「じゃあ、初めてでも仕方がないか」

「もうちよつとで、堤防越えそうですよ」

「越えないよ。それに、越えたって、多少道路に水が流れるだけだろ」

「いったん、越流すると、そのまま破堤するとか言うじゃないですか？」

「はあ？ そんな話聞いたことがないぞ。コンクリートがそんな簡単に崩れるか？」

「コンクリートは外側だけで、中は土じゃないんですか？」

「さあ。きつと鉄筋コンクリートだろ。さつさと仕事に戻れ」

「坂崎さんはご家族のことが心配なんじゃないですか？」 同僚の佐藤さとうひろみが言った。

「家族？」 大村が怪訝けげんそうな顔をした。

「最近まで、単身赴任だったのを先月、こっちに呼んだんでしょ」

「ああ。確かそうだったな。家、近くだったか？」

「まあ。そんなに近くはないんですが、ここよりちよつと上流の方で……」良平は不安げに言った。

「家が流されるのが心配か？」大村は少し馬鹿にしたように言った。

「いや。家というかですね……」

「心配するな。ここの上流にはあれがあるんだから」

「あれ？」

「なんとかいいうダムだ」

「ダム？」

「この辺りじゃ一番でかいダムだ。俺の子供の頃からある有名なダムだ。知らないか？」

有名だと主張するわりに、自分はダムの名前も覚えていないらしい。

「この辺りの地理にはまだ疎いんですよ。なにしろ、家と会社の往復しかしてないですから」

「飲みに行くこともあるだろ」

「課長、無茶言わないでください」ひろみが口を挟んだ。「ダムの方に飲みに行くはずないでしょ」
「そう言えば、そうだな。ここいらで育った者はみんな小学校のうちにあそこに遠足に行くから、よく知ってるんだ。ダムの上には湖があつて、ちよつとした自然公園になつていてな……」

「自然公園ですか？」

「そうだよ。自然公園だ」

「自然公園があると安全なんですか？」

「自然公園があるからじゃなくて、ダムがあるから安全なんだよ」

「ダムって、発電とかするんですよね」

「発電もするけど、あれだ。洪水のときなんか、水を堰せとき止めたりするんだ。よく知らないけど」

「えっ？　知らないんですか？」

「いや。ダムってのは、たいがいそういうもんだろ。常識的に」大村は言った。「たくさん、雨が降ったら、水門を閉めるんだ。そうすれば、下流の洪水が防げる」

「でも、水量、結構多いですよ」

大村は川の様子を見て、顎あごを撫なでた。「あれだな。きつと支流から流れ込んでくるんだ」

「支流ですか？」良平は納得いかなかったが、逆らう気はなかった。大村にダムの知識がなさそうだったからだ。

「今、ダムの水門開けてるみたいよ」ひろみがパソコンの画面を指差した。

「おいおい。仕事中に何してるんだよ？」大村が言った。

「さつき、三時の小休憩のチャイムが鳴りましたよ」

「えっ？ もうそんな時間か？」大村は腕時計を見た。

「ダムの様子を映像で中継しているサイトよ」

「へえ。こんながあるんだ」良平は画面に見入った。

巨大な壁のようなダムの四か所の水門が開放され、そこから凄まじい勢いで、水流が噴き出していた。

「毎秒一千トン放流って書いてあるわ」

「一千トン……」大村は画面を見て、呆然^{ぼうぜん}としていた。

「どうして、洪水なのにダムの水門を開けているんだろう？」良平は言った。

「洪水だからでしょ？ ダムが満杯になったら、まずいんじゃない？」

「なんで、満杯がまずいんだよ？」大村が尋ねた。「上から水が溢^{あふ}れ出るだけだろ。滝みたいに」

「わからないけど、強度とかの問題じゃないですか？」

良平とひろみの携帯が同時に鳴った。少し遅れて、大村の携帯が鳴った。ほぼ同時に事務室のあちこちで携帯が鳴った。

「何だ？ 何だ？」大村は懐から携帯を取り出した。「避難勧告が出たみたいだな」

「えっ？」良平も慌てて携帯を見た。

避難勧告が出ている場所を確認すると、自宅の住所も入っていた。

良平は妻の加奈子^{かなし}の携帯に電話を掛けた。

しばらく呼び出し音が続いた後、留守番電話に

繋つながった。

「避難勧告が出ているみたいだけど、大丈夫かい？ これを聞いたら、連絡してくれ」

「奥さん、出なかったの？」ひろみが心配そうに尋ねた。

「うん。たぶん大丈夫だと思うけど」

「大丈夫に決まってるだろ。洪水になったら、ニュース速報が流れるだろう。避難勧告なんて、万が一のことがあったときに文句を言われるのが嫌で、市がアリのバイのために流してるだけなんだから」

おそらくそうなんだろうな。

良平は思った。

気象警報や避難情報なんかしょっちゅう発令されてはいるが、実際に身の回りで災害が発生したことなど一度もない。こういうものは安全を見越して、少し大きさに出されるものだ。だから、警報や避難情報なんて、恐れる必要はないし、いちいち真に受けるのは大人として恥ずかしい。その程度の常識はある。

しかし、良平はなぜか気になった。

不安なのは、引越してきて早々だということもあるのかもしれない。自宅がダムのおすぐ傍そばにあるということも今の今まで気付かなかった。この激しい放流の映像もより不安感を増す原因になっているのかもしれない。

しかし、現に永年ここに住んでいる大村は落ちて着いている。本当に慌てる必要は全くないのだから。

「おい。まだ心配してるのか？」大村がからかうように言った。「大丈夫だ。あのダムは六十年もあの場所で踏ん張ってるんだ。『石の上にも三年』ならぬ六十年だ。滅多なことじゃびくともしないさ」

そうか。六十年も経たってるのか、それなら大丈夫だ。

……えっ？ 六十年。

「あのダム、そんな大昔からあるんですか？」

「そうだよ。この川の主みたいなものなんだな」

それでいいのか？ そう考えるのが正しいの

か？

良平は混乱してきた。

「あの。課長、古いつてことは、つまり……」

また、携帯が鳴り出した。今度はもっと大きい。

「何だ？ 今度は避難指示か何かか？」

全員の携帯が次々と鳴り始める。さつきとは違う警告音だ。

「違うわ。避難指示じゃない！」ひろみが叫んだ。

「地震が来るわ」

「緊急地震速報！ 大きな揺れがきます！」館内放送が流れた。

ひろみは机の下に逃げ込んだ。

「えっ？ えっ？ えっ？」大村はきよろきよろと周りを見ていた。

「課長、机の下です」そう言うと、良平も机の下に逃げ込んだ。

事務室の中では、机の下に逃げ込む者がほかに何人かはいたが、大部分はただおろおろと歩き回ったり、ぼんやりと身動きできずにいたり、何も聞こえていないかのように仕事を続けたりして

いた。

「正常性バイアス」という言葉が良平の脳裏を掠^{かす}めた。人間は常に恐れてばかりはいられない。そんな状態では神経が磨^すり減り、ストレスで精神や肉体の健康を害してしまう。だから、「自分には不幸はやって来ない」と思い込むことで防衛するのだ。だが、本当に危機が訪れた場合、この心の機能はマイナスに作用することになる。警報の中、黙々と仕事をする人間は度胸が据わっている訳ではないのだ。単に、恐怖することを避けるため、懸命に危機を否定しているだけなのだ。

部屋の中のあらゆるものがたがたと揺れた。

「ふん」大村は鼻を鳴らした。「まあ、だいたいこんなもんだよ。こんな警報があると、余計どきどきするだけだよな」

どん！

部屋中の全て^{すべて}のものが跳ねあがった。机も椅子^{いす}も文房具もパソコンも人間も。

「何だ!？」

次の瞬間にはもう何が起こっているのかわから

なくなつた。人間を含むあらゆるものが目の前を飛び交つた。

良平は激しく振り回されながらも、全力で机の下で机の脚を掴つかんで身体を固定しようとした。

あっちこっちに飛ばされたが、机ごとだったので、なんとか怪我けがは免れていた。

大村はもうどこに行ったのか、わからなくなつていた。

ひろみは少し離れた場所で、良平とおなじく机の下でその脚にしがみついていた。

長い！

良平は苛いら立ち始めた。

今まで地震は何度か経験したが、こんなに長いのは初めてだ。もう何分も、続いているような気がする。

— そうだ。加奈子と裕彦ひろひこはどうしているだろう？
きつと心細いことだろう。

だが、電話を掛ける余裕は全くなかった。

早く止まってくれ！

良平はそう願うしかなかった。

揺れが小さくなってきた。

机の飛び跳ねが収まってきた。

良平はもう一度事務室内の様子を確認した。

あらゆるものが散乱していた。机、椅子、パソ

コン、キャビネット、書籍、文書ファイル、食器、

靴……。

窓ガラスは大部分が砕け散り、壁には幾筋も亀裂が入っている。

倒れている人々も大勢いた。中には血を流している者もいる。

「みんな、大丈夫ですか？」良平は大声で叫んだ。

あちらこちらから声上がる。

動ける者たちは立ち上がって、怪我人の様子を見て回った。

少なくとも、事務室内では意識のない者や重傷者はいなかった。

大村は呆然と床の上に座り込んでいた。

放送システムがどうにかなったのか、室内のスピーカーはうんとすんとも言わない。

「課長、どうしましょう？ 避難しましょう

か？」良平は大村に尋ねた。

大村は返事をしなかった。

「課長！」良平は大村の肩を掴んで揺すった。

「あわわわわ!!」大村は悲鳴を上げた。

「避難しましょうか？」良平はもう一度訊いた。

「地震だ!! 地震だ!! 地震だ!!」

「わかっています」

「机だ。机の下に入るんだ」大村は倒れていない机を探して、その下に逃げ込んだ。

良平には、この大村の行動が正しいのかどうかもわからなかった。

とにかく現状を把握しなければ。

良平は天井を見た。電気は点いている。停電にはなっていないようだ。

「坂崎さん！」ひろみが床に落下して罅割ひびわれているパソコンの液晶画面を指差した。「これを見て！」

そこには先程のダムの様子が映し出されていた。先程と同じように水が放流されている。

あれ？

良平は違和感を覚えた。

さっき見た映像では、水流は四つの水門から流れ出していた。だが、今は水門とは別の場所から水が流れ出している。

良平は液晶画面を立てて、もう一度画面を見直した。

水はダムの表面にできた線状の部分から流れ出していた。

「これって……」ひろみが怯おびえたような声を出した。

「ダムに亀裂が走ってる」

「大丈夫よね」

「わからない」良平は首を振った。本当に全くわからなかったのだ。

「課長、ここからダムは近いんですか？」

大村はまだ机の下で縮こまっていた。

「課長！」良平は大村の腕を掴ひんで引き摺ずり出した。「重要なことなんです。ここまで水が押し寄せてくる可能性はありますか？」

「ないないない」大村は首を振った。「ここは内

陸部だから津波は来ない」

「津波じゃなくて、ダムが決壊が迫ってるかもしれないんです！」

「ダム？」

「そうダムです。ここからダムまでどのぐらいですか？」

「ええと……ええと……」どうやら咄嗟とつぎには出てこないらしい。

パソコンで調べるしかないか。

そう思ったとき、ひろみが叫んだ。「ダムが!!」
見ると線だった亀裂が突然広がり、尋常ではない量の水が噴き出していた。亀裂はほんの数秒でダムの幅の半分の広さになり、そしてダムの堤体は砂山のように砕け散った。

凄まじい勢いで土砂を含んだ水流が押し寄せてきたと思った次の瞬間、映像は消えた。カメラが流されてしまったのだろう。

「ダムが決壊した……」

落ち着くんだ。考えるんだ。

良平は自分に呼び掛けた。だが、何も考えられ

なかった。息が苦しくなってきた。深呼吸を繰り返すが、全然肺に空気が入ってこないような気がする。気分が悪くなり、部屋がぐるぐると回った。この恐怖感は何だ？ 恐怖に負けていては助かるものも助からないぞ！

「洪水が来る！ 大変だ。逃げないと……」大村がふらふらと歩き出した。

「待ってください、課長。まず、状況を把握すべきです」ひろみが言った。「闇雲やみくもに逃げても逃げる途中で水に追いつかれる危険があります。ここは鉄筋コンクリート製の建物です。中に残った方が安全かもしれません」

大村は窓辺に向かい、外を見た。「うわー!!
もう水が来ている」

「何だって!？」

いくらなんでも早過ぎる。ひよつとして、この近くで川の堤防も決壊したのか？

良平もふらつきながら、窓辺に向かった。

外を見ると、駐車場の車が窓の高さ付近まで、泥に浸ひたかっていた。泥はさらに量を増しているよ

うだった。

川の方を見ると、相変わらず濁流だったが、急激に水嵩みずかさが増した様子も堤防が決壊した様子もない。

「これは洪水じゃありませんよ。液状化現象です」良平は言った。

「液状化？」大村はぼんやりと言った。

「地震の揺れで地下水が地表に噴き出してきたんですよ」

「でも、ここは海から遠いし、埋立地じゃないでしょ」ひろみが言った。

「埋立地は海だけとは限らない。ひよっとするとここは昔、川だったのかもしれない。自然の状態では川は蛇行しているから、人工的に真まっ直すぐにした可能性もある。それとも、田んぼがあったのかもかもしれない」良平が答えた。

「この泥の中を避難することは可能かしら？」

「それはどうだろう。泥に足をとられるだろうし、土石流がここに到達するまでにあとどのぐらい時間があるかにもよるだろう……」

そうだ。時間だ。ダムからここまで何キロあるんだ？　そもそも水の速度は？　ダムからここに向かって濁流が流れる様子を想像した。そして、恐ろしい考えが浮かんだ。

いや。俺はその可能性にずっと気付いていたんだ。さつきから全身を貫く恐怖はそのことに対する恐怖だったのだ。

「皆さんはこの建物の中にいてください」良平は言った。「できるだけ上の階がいいかもしれない」良平は出口へと向かった。

「待って、坂崎さん。どこに行くの？」ひろみは良平を引き留めた。

「家だ。ここより上流にある。土石流は家の方に先に到達する」

「馬鹿なことを言わないで！　水に向かっていくなんて無謀だわ！」

「馬鹿なものか！　家には妻と子供がいるんだ！」

「きつと、もう逃げているわ」

「そんなこと、君にどうしてわかるんだ？　根拠はあるのか？」

「根拠は……ない。根拠はないけど、逃げていると信じなければいけないのよ」

「何をめっちゃくちゃなこと言ってるんだ？」

「『津波でんでんこ』よ」

「何だよ、それ？」

「津波が起きたときのための標語よ。『肉親にも構わずそれぞれが一人で高台へ逃げろ』という意味」

「今、津波は起きていない」

「土石流だって一緒よ。山津波とも言うもの」

「でも、あいつらが逃げてなかったらどうするんだ？」

「あなたが助けに行ったら、あなたが助からない可能性が高いわ。もし二人がすでに逃げていても、あなたは犠牲になってしまう」

「だから、二人が逃げていなかったら、と言ってるんだ!!」

「その場合は一家全滅だわ」ひろみは静かに言った。「もし助けに行かなければ、あなただけは助かる」

「そんなことになったら、俺はもう生きてはいられない」良平はひろみを見無視して、再び進んだ。

「待って！」ひろみは良平の前に飛び出し、両手を広げた。「行かせない！」

「すまん！」良平はひろみ突き飛ばした。

ひろみは様々なものが散乱する床に倒れ込んだ。彼女が起き上がったとき、すでに良平の姿はそこになかった。

膝ひざまで泥水に浸かりながら、良平は建物の外に出た。

会社の敷地内も敷地外も騒然としていた。

大雨もまだ降り続けている。

社内ルールに決められた通りに、駐車場脇わきに整列している社員たちもいたが、ただうろうると、あちこち見て回る者や、外に出ていく者が殆どほとんだった。

最優先すべきは命だ。会社のルールは守るべきかもしれないが、液状化している場所で土石流の到来を待つのは馬鹿げている。

良平は、整列している者たちにまもなく土石流が押し寄せるから、建物の中に入った方がいいですよ、と告げて会社の敷地外に出た。

鉄道が動いていないことは、会社のすぐ脇を走っている線路を一目見てわかった。レールがぐにゃぐにゃにねじ曲がっている。

ここから家までは数キロだ。徒歩でもそんなにはかからないはずだ。

良平は泥の中を走り出した。

かなりの家が倒壊していた。古い木造の骨組みの木材が刃やいばのように突き出している。木造でも比較的新しいものや鉄骨の家は外面的には殆ど被害がないように見えた。

泥に足をとられて、思うように走れなかった。気付くと、全身が泥だらけになっていた。

殆どの人々は川の上流から下流に向かって走っているため、良平と同じ方向に進む者は極ごく僅わずかだった。

「ダムが決壊したそうですよ」擦れ違いざまに若い男性が教えてくれた。「早く逃げないと濁流に飲み込まれますよ」

「ありがとうございます。でも、わたしは家族の元に向かわなければならぬんです」良平は答えた。

男性は一瞬心配そうな顔をしたが、首を振ると、そのまま走っていった。

風に乗って、微かにスピーカーの声のようなものが聞こえてきた。

「……ダムが決壊しました。皆さん、速やかに命を守る行動をとってください。低地は危険です。高台に避難するか、近くの高い建物に逃げ込んでください」

あと、どのぐらい余裕があるのだろうか？ ダムから家までの距離はいくらなんだろう？ 水の速度はどのぐらいなんだろう？

「あなたも家に向かってるんですか？」 中年男性に話し掛けられた。同じ方向に進んでいるようだ。

「ええ。家内と子供がいるはずなんです」

「連絡はとられたんですか？」

「いえ。まだ……」

そうか、連絡すればいいんだ。

良平は内ポケットから携帯を取り出した。

駄目だ。電波が来ていない。

「電波の状況はよくないみたいですよ」 中年男性は言った。「わたしも連絡が付かないんです」

「ダムが決壊したのはご存知ですか？」

「人がそんな話をしているのは聞きました。でも、本当なんでしょうか？　災害の後は流言が飛び交うと言いますし……」

「ダムが決壊は本当です。ネットで見ていました」

「じゃあ、この地震はダムの決壊で発生したんでしょうか？」

「さすがに、そんなことはないでしょう。地震が決壊の原因ですよ。ダムに亀裂が入ったのも、地震の後でしたし」

「もしダムが決壊していたとしたら、この道を走るのは拙^{ます}いんじゃないでしょうか？　川のすぐ横ですよ」中年男性は不安げに言った。

「しかし、山側の道を通ると、随分遠回りになってしまうと思います。この辺りの地理には疎いのではつきりとは言えませんが」良平は言った。

「確かに、あそこまで行くのはかなり時間が掛かりそうですね」中年男性は山の斜面に立ち並ぶ住宅街を眺めた。

ところどころ煙のようなものが上がってはいる

が、豪雨のおかげか火の手は上がっていないようだった。

「このまま進んでもいいんですが、この水路が気になるんです。これに沿って濁流が流れてくるんじゃないかと」男性は堤防のすぐ外側を流れる水路を指差した。

たぶん雨水を集めるために設けられた水路で、どこか下流で川の本体に流し込むようになってい
るのだろう。ダムの濁流は川本体に流れるのはもちろんだが、この小さな水路にも流れ込んでいるかもしれない。もしそうなら、いつきに水が溢れ出し、流されてしまうかもしれない。

「わかりました。じゃあ、堤防に登りましょう」良平は提案した。

「しかし、それだと、溢れた水で堤防の下に流されるかもしれない」

「川が溢れてくるなら、堤防の下にいてもどうせ同じことでしょう。少しでも可能性のある方に進みたいと思います。もし不安なら、あなたは山側の道に進んでください」

男性は少し悩んだ後、言った。「わかりました。わたしも一緒に行きます。こうして悩んでいる時間ももったい勿体ない」

二人は雨でずるずるになった堤防をなんとかして登り切った。

やはり、コンクリートではなく、大部分が土でできているようだった。

良平は上流の方角を眺めた。

豪雨のため、視界は悪く、二、三百メートル先までしか見えないが、濁流はまだ来ていないようだった。

「さあ、急ぎましょう」

堤防の上には泥がなかったため、下の道よりもいくぶん進みやすかった。しかし、堤防自体は内側や外側があちこちで崩れかけていた。増水すると、いつきに決壊してしまいそうに思えた。

二人は黙々と走り続けた。

数分後、中年男性は立ち止まると、はあはあと苦しそうに喘あえいだ。

「大丈夫ですか？」良平は尋ねた。

「少し、呼吸が乱れただけです。年ですね。わたしは少し休憩してから行きますので、あなたは先に行ってください」

良平は一瞬迷ったが、男性の言葉に従って、一人で行くことにした。

走り出して、すぐに地響きを感じた。

勘違いかと思い、足を止めた。

確かに、振動を感じる。

豪雨を透かして、遙か前方を望んだ。

上流に微かに白い煙のようなものが見えた。距離から推測するに相当に巨大なものだ。

良平は見間違いでないかと目を擦った。

煙は突如大きくなった。見る見る巨大さを増してくる。

いや。巨大になったのではない。凄まじい速度で近付いてくるのだ。

良平には時速百キロぐらいに感じられた。

堤防で防げるようなものでは到底なかった。堤防もそして堤脚水路もその横の道も付近の住宅も

——全てを巻き込む巨大さだった。

良平はなんとかあの濁流をやり過ぐすことはできないかと考えた。早く家族の元に行きたかったのだ。

だが、土石流が近付くにつれて、そんなことは不可能だと悟った。

今、あの水から逃げなければ、二度と家族に会うことはできなくなる。

良平は回れ右をすると、一目散に走り出した。

先程の中年男性が水流を見て、目を見開いたまま立ち尽くしていた。

「逃げないと危ないですよ！」横を通り抜けるときに良平は叫んだ。

だが、まだ男性は動かず、濁流を凝視しながら眩いていた。「あれじゃあ、無理だ。もう、あいつらも……」

人のことなんか構っている場合じゃない。

良平は歯を食いしばった。

一人だって、逃げられるかどうかわからない。

あの男をつれていく余裕なんかない。逃げる気がない者は放ほうっておくしかないんだ。

ああ。くそっ！

良平は男性の元へと引き返した。

土石流は百メートル手前まで迫っていた。

「逃げますよ！」良平は男性の手を引っ張った。

「もう無理だよ」

「家族に会いたくないんですか？」

「あいつらはあの向こうにいるんだ。とても助からない」

「避難してるかもしれないじゃないですか！」

「えっ？」

「津波でんでんこですよ」良平は男性の手を掴んだまま、強引に走り出した。

男性も躊躇ちゆうちよしながらも走り始めた。家族が避難している可能性に賭かけることにしたのだろう。

確かに、あの土石流に襲われて家が無事とは思えない。だが、きっと加奈子と裕彦は避難しているはずだ。

どかんどかんと凄まじい音が近付いてくる。

もう振り向く余裕はなかった。振り向く力があるなら、それは前進に使うべきだ。

背中にばしゃばしゃと水が被^{かぶ}り始めた。

ふと、堤防の上と下とどちらで土石流にぶつかった方がましだろうかと考えた。

しかし、今から堤防を降りようとしても、途中で土石流に捕まるのは目に見えていた。とにかくこのまま突っ走ろう。

良平はそう心に決めた。

どん。

良平たちは何かに突き飛ばされた。

地面から一メートルほど上を滑空している。

土石流の本体にぶつかる前に圧縮された空気の壁にぶつかったのだ。

だが、空気のクッションはいつまでも優しく包んでくれはしなかった。大量の瓦礫^{がれき}を飲み込んで成長した水の塊が良平たちを絡め取った。

中年男性は一瞬でどこかに行ってしまった。

目の前の泥水の中にぼんやりと岩や木材の破片が乱舞しているのが見えた。

もがくことすらできなかつた。ただ、水の流れに身を任せるだけだ。人間の力など全く存在しな

いかのようだ。ぐるぐると振り回され続ける。

何かが右脚にぶつかった。強烈な痛みを感じる。脚の骨が砕けたような気がした。ひよっとすると、もう右脚は千切れ飛んでなくなっているかもしれない。手足が切断された人はなくなった手足が痛むことがあるというではないか。

そう言えば、もう随分息をしていない。そろそろ窒息する頃だろう。それにしてもあまり苦しいという気がしない。本当に溺れるおぼるときはこんなふうに苦しくないものなのだろうか？ ひよっとすると肺の中に水が入ると、脳内麻薬が分泌されると、苦しくなくなるのかもしれない。いや。ひよっとすると、俺はもう死んでいて霊の状態で溺れているのだろうか？ だとしたら、苦しくないのも当然だ。でも、ここはもうどうしようもないようだ。足搔あいても水の力の前には無力だ。もう力を抜こう。水に抵抗するのはやめだ。諦あきらめた訳じゃない。ただ、死ぬにしても生きるにしても無駄に力を使いたくないだけだ。

良平は力を抜き、まるで洗濯機の中の洗濯物の

ように水に全てを任せた。

ああ。このまま、俺は終わるのか。最後に加奈子と裕彦に会いたかった。

ごとおおお。

水の音が聞こえた。

いきなり息苦しくなった。

良平はごほごほと咳せきをした。喉のどの奥からばしゃばしゃと水が流れ出す。

何が起きた？

良平は周囲を見渡した。

大量の泥水が良平の身体を掻かき分わけて流れ続けた。堤防らしきものは見当たらない。大きなもの、小さなもの、様々なものが流れていく。大きなものは住宅そのものや自動車、小さなものは家具や電化製品、そして人間だ。

次々と流れてくる人間は生きているのか、死んでいるのか判断が付かなかった。どっち道、この激流の中を助けに行くことはできない。ときどき大きな木材などに掴まって流れていく者たちがいて、それは確実に生きてはいたが、良平よりよっ

ほど、安全な状況にあるので、もちろん助けに行こうとはしない。

良平は街路樹のてっぺん付近に引っ掛かっていた。顎の辺りまで水が来ているので、遠くまで見渡すことはできなかったが、とにかく目に入る範囲は全て水浸しだった。

落ち着け。よく考えるんだ。

良平は深呼吸をした。

ごほごほと咳込む。

咳が出るのは気管に水が入ったからだろう。肺が水で満たされたら、すぐに失神してめったなことでは自発蘇生そせいしない。ということは、溺れている時間はさほど長くなかったということだ。長く感じていたのはあくまで主観であって、実際には数秒か長くて数十秒程度だったのだろう。

さて、これからどうすべきだろうか？

このまま助けを待つのが最善な気がする。しかし、水温はかなり低い。このまま何時間も流水の中に入ったら、おそらく低体温状態になってしまうだろう。もう少し上って身体を乾かした方がいい

かもしれない。

良平は枝をさらに攀じ登ろうとした。

だが、良平のいる枝は結構細く、良平が少し水から上ると体重を支えきれず曲がってしまい、また水の中に浸かってしまった。

いくつかの枝を試したが、どれも結果は同じだった。

水から身体を出すのは諦めた方がいいかもしれない。となると、ある程度の体温低下は受け入れるとして、生命力が尽きる前に救助されることを祈るか？　しかし、今回の地震はどの程度の範囲に起きたんだろう？

緊急地震速報が出てから地震到達までには結構な時間があったような気がする。ということはつまり、この地域の直下で起こったものではないということだ。震源地までの距離が長いのに、これほどまでの被害が出るということは相当大きな地震だったことになる。となると、救助の側も手一杯だろう。

救助を待つよりも自力で助かる方法を考えた方

がいいかもしれない。

良平は自分がどのように枝に引っ掛かっているのかを確認した。

会社の制服に穴が開いて、枝が突き刺さっている。

なるほど。外そうと思えばすぐに外せそうだ。

もちろんまだ外さない。

俺が助かったのは本当に偶然だったんだ。加奈子と裕彦も助かっているだろうか？

そうだ。俺は加奈子と裕彦を助けなければならぬんだ。ここで悠長に助けを待っている場合じゃない。

良平は流れてくるものをじっと観察した。

身を任せられる程の大きさで、浮力が大きく、すぐ近くを流れてくるものを掴むんだ。

待つこと数分、その条件を満たしそうなものが流れてきた。食堂の看板だ。

もう少ししっかりと身を任せられるものが欲しかったが、待っていても機会が巡ってくるとは限らない。良平は決心した。

服を枝から外すと、看板に向かって飛び出した。良平も看板も相当な速度で流れながら、何度も浮き沈みした。

その度に窒息しかかり、生命の危機が訪れたが、良平はなんとかして、看板にしがみ付くことに成功した。

看板はぐるぐると回転しつつもなんとか安定して流れ続けた。

すぐに、街路樹から離れた自分の判断が正しいかどうか不安になった。

最悪の事態を想定するならば、このまま流され続け、海に出してしまうことだ。だが、さすがに途中に何か所か関門があつて、そう簡単には海に到達することはないはずだ。

目の前に瓦礫の山が現れた。土石流の勢いが落ちて、重い物体が取り残されたのだらう。濁流が瓦礫にぶつかり複雑な渦を作り出す。

良平は家の残骸ざんがいに辿り着くと、看板を離し、攀じ登った。

右脚に激痛が走ったが、なんとか歩くことはで

きた。骨折や脱臼だつきゅうではないらしいが、相当出血している。しかし、この状況下では、ズボンを脱いで怪我の程度を確認する気にはなれなかった。

漸ようやく少し高い場所に立つことができ、街全体の様子を垣間かいまみ見ることができた。

相当な範囲が冠水していたが、まだ結構家は残っているようだった。川から離れるにつれ、被害は少なくなっているのがわかる。

良平は屋根伝いに少しずつ川から離れるルートをとった。

地面の様子を見て、歩けそうだと判断した時点で道路に降りた。

脛すねぐらいの深さだろうと当たりを付けていたが、実際には太腿ふとももぐらいまで水位があつた。だが、水流の勢いはもうあまりなかったので、歩くのには支障がない。もつとも、強く痛むため、走ることは無理だった。

まず現在地を見積もらなければならぬ。携帯は水没してしまったので、たとえ電波が復活していたとしても、使い物にはならない。

良平は記憶を辿って、街の地形を必死に思い出そうとした。

そして、遠くで水の中から突き出している建物がさっきまでいた会社の建物だということに気付いた。おそらく三階ぐらいまで水に浸かっている。ピーク時にはもつと高い階に達していたかもしれない。

会社の位置が確認できたことで、自分の位置もだいたい把握できた。

家はこっちだ。

良平は水没した街の中を歩き出した。

あちらこちらから助けを呼ぶ声が聞こえたが、良平は歯を食いしばって先を急いだ。人々の苦しみは痛いほど理解できた。だが、自分はまず家族を助けなければならぬのだ。

そろそろ自宅に近付いているはずだったが、街の風景に全く見覚えがない。

倒れた電柱や自動販売機の住所表記を見て衝撃を受ける。街並みが絶望的に変貌へんぼうしているのだ。

しばらく歩き、家の住所の場所に辿り着く。

この辺りのはずだ。どうしてないんだ？

何軒か近所の家らしきものは見付かった。しかし、それらの位置関係はばらばらだった。傾いたり倒れたりして、まともな状態の家は殆どなかった。

これは隣の家だ。そして、これは向かいの家。これは裏の家。だとしたら、この間に俺の家があるはずだ。どうして、ないんだ？ そんなはずないじゃないか。

そう。そんなはずはなかった。そこに家はあったのだ。二つの家に挟まれて。ぐしゃりと潰つぶれた家が。

良平は自宅の残骸に近付いた。

ほぼ骨組みだけになっていて、家の中には何も残っていないかった。家具も電化製品も家族の思い出も全て流されてしまったのか？

「加奈子!!」良平は叫んだ。

返事はない。

瓦礫の中に身体を滑り込ませる。

「加奈子!! 裕彦!! ここにいるのか!？」

奥の方は暗くてわからない。

「誰かいなか!?」良平はもう一度叫んだ。

微かに何かが届こえた。

「そこにいるのか!?」

「……」

子供の声だ。だが、何を言っているのかはわからない。

良平は瓦礫の中で動かせそうなものを脇へ放り投げた。

崩れた家の残骸の中に僅かな光が届いた。

蒼あおざめた幼児の顔が浮かび上がった。

「裕彦!」良平は叫んだ。

父の声を聞いて、裕彦は泣き始めた。

「今、助けに行くから、じっとしてらんだ!」良平は瓦礫の隙間すきまを這はいつくばって、進み始めた。

「お母さんはどこにいるっ!」

だが、裕彦は泣くばかりだった。

五歳の子では仕方がない。

「加奈子、大丈夫か!?」

返事はない。

加奈子が裕彦を残して、逃げるはずがない。きっと、裕彦の近くにいるはずだ。ひよっとすると、瓦礫の下敷きになって身動きがとれないのかもしれない。

裕彦はほんの三メートル程先にいたが、家の残骸の状況が全くわからないため、努めて慎重に進んだ。

裕彦は泣き続けている。

「可哀かわいそうに。怖かったろう。家が水に流されたんだね。もう大丈夫だ。お父さんが助けてあげる。お母さんも一緒に逃げよう」

ついに、裕彦に手が届いた。

そして、その背後の人影に気付いた。裕彦の陰になって光が当たっていなかったのだ。

良平は裕彦を抱き上げ、引き寄せた。

後ろにいたのは加奈子だった。落下してきた屋根材が裕彦の上に落ちないように両手と頭で支えていたのだ。

「加奈子、大丈夫か？」

ええ。大丈夫よ。裕彦を先に助けて。

加奈子の顔は苦痛に歪ゆがんでいたが、満足げでもあった。息子の命を守り抜いたことが誇らしいのかもしれない。

「加奈子、動けるか？」

わたしはもう動けないの。わからない？

なぜだろう？

良平は加奈子の顔を見て思った。

今日の加奈子は今までの人生で一番美しかった。
神々しいまでに。

「裕彦を守ってくれてありがとう」

良平は加奈子の身体に優しく手を触れた。

良平の頬ほおに一筋の涙が流れた。

加奈子はもう随分前に事切れていたのだ。